

財団法人 黛民族舞踊文化財団

Three circular ornaments, possibly mirrors or drums, are arranged horizontally. Each ornament has a dark, reflective surface and is decorated with a vibrant, starburst-like pattern of red, yellow, and orange. From the bottom of each ornament hangs a long, multi-colored tassel made of many thin, braided strands in red, yellow, orange, and black.

舞 踊 文 化
E. T. C

N O . 21

目 次

芸能と芸道	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄	2
アジアの舞踊、おりふしの想い ～韓国・国学院&ソウル大学校～	日本大学教授	丸茂 美恵子	4
「遣唐使がもたらした王朝の舞踊とサッカー」	日本女子大学	国枝 たか子	7
自然人アイヌ こころの歌と踊り 第19回 「舟 唄」	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	10
平成24年度黨民族舞踊文化財団活動予定			13

芸能と芸道

学習院大学名誉教授 諏訪 春雄

あいまいな芸能と芸道の関係

芸能と芸道はどのような関係にあるのか。しばしば重なって用いられることもあるこの二つのことばについて、まだ厳密な定義はない。

たとえば『日本国語大辞典』「芸能」の項目をみると、「①学問、芸術、技能など、貴族やりっぱな人物が身につけていなければならない各種の才芸、技芸。②学問、芸術、技能などについてのすぐれた能力。③生け花、茶の湯、歌舞音曲などの芸事。遊芸。」と説明がある。「芸道」の項目をみると、「芸能の道。技芸の道。」とある。その「道」の意味が知りたいのである。

日本の芸能という語は中国から継承している。芸道は日本で中世に誕生した和製漢語で、中国では現代まで用例がない。芸能は、大江匡房の談話を集めた『江談抄』に「吉備大臣入唐、道ヲ習イ、書道芸能ニ博達シテ聡慧（さと）キナリ。」とあり、芸道は世阿弥の『花鏡』に「一切芸道に、習々覚して、さて行道あるべし。」などが早い例である。



芸能と芸道の共通の母胎祭り
奈良大三輪神社おんた祭りの巫女舞



幟、旗、祭壇など神迎えの依代を並べた舟の祭り
松江市蒼柴垣神事

芸道は祭りの依代から誕生

芸能は祭りにおける巫の身体所作から生まれた。現在の定説である。日本の祭りは、巫つまりシャーマンを仲介者に神霊と交流するシャーマニズムの系統に入る。芸道はその祭りで神を迎える装置・仕掛けの依代から誕生した。神は、動かない自然物をあがめる自然神から、人間の祈願に応じて動きまわる人格神に変わった。その段階で神を迎える座または目標となる依代が誕生した。依代は、山、海、樹木などの自然物から御幣、幟、祭壇などの人工物へと変化した。

人の技として発達した依代から芸道は誕生した。

神を迎える巫の身体所作が長い時間をかけて、芸能、芸能から芸術へと変化したように、人工物の依代も長い時間をかけて、神仏を祀る技、技から芸道、芸道から芸術へと変化した。このような捉え方で、はじめて、伝統文化の根幹をなす芸能と芸道の二分野が祭りから誕生したことの統一的把握が可能になり、芸道の本質も理解できる。

道は技術を超える

道ということばを理想的境地の意味で使用する用法は中国の老子・荘子の哲学にはじまり、老荘思想の受容とともに日本人にも浸透した。「道は道を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずる」などの記述が老子の『道徳経』に出てくる。さらに、『荘子』の「養生主篇」に次の話が出てくる。

包丁という料理の名人がいた。主君の文恵君がその技量を賞賛すると、包丁は「臣の好むところは道なり、技よりは進めり」と答えた。包丁^{ほうちよう}という語の起源になった話である。技術を超えた道こそが自分の求めるものだという答えであった。この道は、老荘哲学でいう、あらゆる存在の根底の混沌であり、名状しがたいもの、森羅万象がそこから生じる、宗教でいう神の如き存在をさしている。

「道は技術を超える」という思想は、中世以降の日本に影響を与え、歌道、弓道、剣道、棋道、茶道など、本来ならば「技」や「術」を追求すべき芸が一様に道を称するようになった。さらに、これに音楽、文芸、工芸、絵画、建築、料理などを加えて、広義の芸道とよぶならば、共通する本質は《瞬間的に消滅する身体的所作ではなく、なんらかの道具を使用し、その結果がのちに残るもの》ということである。芸道は道具と技を極めて神仏と一体化する方法となったのである。



女性のたしなみ華道
北尾重政「生け花図」

アジアの舞踊、おりふしの想い ～カンボジア・王宮の舞姫への追憶～

日本大学教授 丸茂 美恵子

私が2008年12月にカンボジアへ訪問したことは以前にも話してきたが（『民族舞踊文化』No.21・『舞踊文化 E.T.C』No.19）、今回は、なぜ私がカンボジアの宮廷舞踊に関心を抱いたのか、視察当時のカンボジアの舞踊状況は如何か、また宮廷舞踊の踊り手を母に持たれたオム・ユヴァンナー教授（Prof. Om Yuvanna）の昔話を交え、カンボジアへの想いを綴りたい。

日本ではカンボジアの芸術情報が極めて少ないため、この訪問にあたり、当時ユネスコ・プノンペン事務所長でいらした神内照夫氏とカンボジア古典舞踊家の山中ひとみさんのお二方に並々ならぬご尽力とご教示を賜ったことに感謝と御礼を申し上げる。

・古典舞踊記録プロジェクトのこと-『アジアセンターニュース』No.16（2000年11月発行）

私がカンボジアの宮廷舞踊の動向に関心を抱いたのは今から一昔も前のこと。国際交流基金アジアセンターの機関誌に報告されたロバート・ターンブル氏による「カンボジアの古典舞踊記録プロジェクト」を読んだのことだった。概略は、

クメール・ルージュ政権下にアンコール王朝文化が一挙に破壊され、1981年の舞台芸術の調査結果で「舞踊家のわずか10パーセントしか生き残っていないという事実直面した」という事態が明らかになった。その後、ロックフェラー財団の助成を受けたニューヨークのアジアン・カルチュラル・カウンシルが「長老による指導プログラム」を実施し、年老いた舞踊家たちから口伝の奥義を披露してもらった。が、成果を記録する記述方法に統一と正確さを欠いていたため、複雑な作業を要する調査と記録に重点を置いたプロジェクトが国際交流基金アジアセンターの助成で17ヵ月以上にわたって実現され、王宮の古典舞踊のレパートリーである65作品のうち約半分が1997年までに蘇った。

というもののだが、折しも、新聞紙上で日本画の巨匠・平山郁夫氏がカンボジアのアンコールワット遺跡の保護・救済活動に取り組んでいるという記事を目にし、片や気付かぬうちに失われてしまう無形のものの儚さに私はつい無念さを覚えたのだった・・・。



中央がウック・ソチャット文化芸術大臣、隣が筆者
肖像画は昔の宮廷舞踊の名手（文化芸術省にて）



山中ひとみ氏に稽古をつけるオム・ユヴァンナー教授
（オム・ユヴァンナー教授宅にて）



左から山中氏、ユヴァンナー教授、筆者
当日、盛大な結婚式が行われ、玄関は華やかに
飾られていた(ホテル・カンボディアナにて)

そういう思いがようやく叶って、NANAプロジェクトで 2008 年にはカンボジア訪問に漕ぎ着けたわけである。

・「アジアの国の人たちが今何を求めているのか」—神内照夫氏からの御助言

神内照夫氏とは 2004 年 6 月にタイのバンコクで開催されたユネスコ／アッパン人形劇 フェスティバル&シンポジウム (UNESCO/APPAN Festival and Symposium of Puppetry) で初めてお会

いした。その時に神内氏から「アジアの国の人たちが今何を求めているのかを知り、その手助けをしてあげることが大事だ」という意見を伺ったのが、私がアジアに向き合う姿勢のその後の方向付けとなった。私流に解釈すれば“私たちの考えや手法を押しつけてはいけない”ということで、とかく先進国の人間には忘れがちな姿勢を戒めたものと私は受け止めた。その一言が印象的だったため、NANA プロジェクトでカンボジアを視察先に決めた際、神内氏にまずご相談し、そのなかで次のような情報を戴いた。

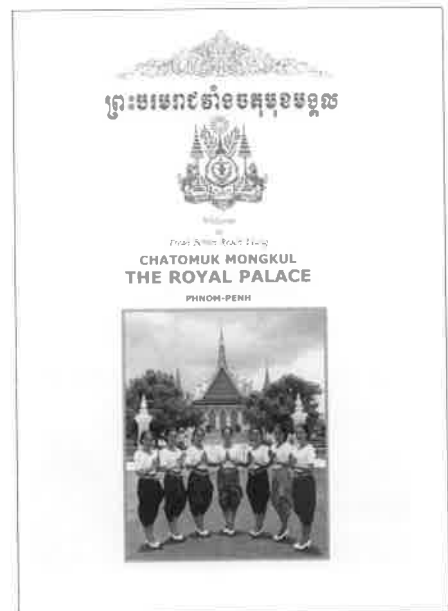
カンボジアの伝統芸術を保護・継承する目的で人間国宝制度設立プロジェクトを2年前から行っており、ユネスコ韓国基金を通じてカンボジアの文化芸術省を支援している。

カンボジアは驚くほどのスピードで経済発展をしているが、まだ長年の国内紛争の影響が残っており、特に芸術家・文化人にとっては良い環境ではない。

そうして神内氏のご紹介で文化芸術省を訪問し、文化芸術大臣のウック・ソチャット氏 (Mr.Ouk Socheat) に古典舞踊記録プロジェクトについて伺った際、「これまでに少しずつ整備してやっている。1つは調査して、2つめは無くならないように守る、3つめはアレンジする。」「次世代を担う子どもたちに、本にしたり、ビデオに収めていくなどして、今まであった文化が無くならないようにして発展させていきたい。」という方針を伺うことができた。

・圧政時代を生き延びた古典舞踊家の一人—オム・ユヴァンナー教授の聞き書き

王立プノンペン芸術大学付属芸術学校古典舞踊科を日本人として初めて卒業し、現在カンボジア古典舞



王宮のパンフレット表紙

踊家として活躍されている山中ひとみさんのご紹介で、彼女の恩師のオム・ユヴァンナー教授宅を訪問し、山中さんへの個人レッスンの様子を再現していただいた後、カンボジア舞踊が王宮で伝承されていた頃についてインタビ



王宮内のチャンチャヤー（パンフレットより）

ューをした。往昔、王宮で舞踊が行われていた頃の思い出を、次のように語られた。

王宮のチャンチャヤー（CHANCHHAYA：月見台）や、ポーチャニー（PHOCHANY：迎賓館）で踊りを稽古したり披露したりしていた。昔、母（宮廷舞踊の踊り手）は王宮内に住んでいたが、私は王宮の中に住まず外から通った。

子どもの頃、年取った先生に習ったが、母がちよこちよこ覗き見て厳しく教えられた。肩を下げるとか、顎を上げる、とか皮が剥けるほど厳しい稽古で、腰の上下運動を2～3時間もやらされたり、「夜叉の足」（丸茂注：箱立ちになり片足を上げ下げする）を朝から夕方までやらされたことをよく覚えている。

1953年独立後は先生と踊り子、その家族を含め300人ぐらいがいた。猿役の先生は男性で男子の生徒は少なかった。



王宮内のポーチャニー（パンフレットより）

文化芸術省を訪問させていただいた折、ソチャット大臣が「カンボジアの芸能がユネスコの無形文化遺産に登録された時、一緒に居合わせたが、神内さんが自国のことのように喜

んで下さった。神内さんにはいつまでもカンボジアにいていただきたい」とおっしゃっていた。カンボジアの宮廷舞踊がユネスコから2003年に、スバエク・トム（影絵芝居）が2005年に「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言された蔭には、民族の壁を越えて一人の日本人の存在があったことを忘れてはならない。神内氏は、2010年11月にユネスコを定年退職され、現在はカンボジア政府の顧問官に就任されていらっしゃるそうだ。アジアで出会った素晴らしい日本人の一人である。

「遣唐使がもたらした王朝の舞踊とサッカー」

日本女子大学 国枝 たか子

1. シルクロードから遣唐使の話題へ ～井真成という名の留学生～

ペルシャ、中央アジア、西安を結ぶシルクロードには、それぞれの音楽や舞踊が伝わっていて、ユーラシア大陸の極東に位置する日本まで、はるばる旅をしてきた楽器やダンスが現存している。とくに唐時代は「遣唐使」による往来が行なわれていたため、音楽や舞踊とともにスポーツのような身体活動も伝えられた。後述するが、ある意味で武術やスポーツと舞踊や音楽はセットになって伝来したのではないかと推察される。

振り返れば、まだ15才のころに古典文学の先生から「長恨歌」の手ほどきを受けたが、その時に楊貴妃が歩く様を、よちよち歩きのように心もとない弱さで美しかったと伺った。数十年にわたり、その言い伝えを信じ込んでいた私であったが、十年前に西安の大学へ研究調査で伺った際に「いやいや、とんでもない誤解だった」と思い知った。唐時代の女性は、ちょっと文献をひもとくだけで分かることだが、宮中では「白打」と呼ばれる「サッカー」のシュートを楽しんでいた。また馬に乗って郊外を自在に楽しみ、時にはスティックを持って、馬上からパスする「ポロ」をやっており、闘争心むきだしで相手チームと戦ったようだ。

後年、台湾の故宮博物院の特別展示で、この唐時代の女性のポロ像が出品されたのを見た。顔も大きく頑丈な女性で、馬を自在に乗りこなして「ポロ」の長いスティックを振っていた。これには感動した。美術品としてもすばらしいものだが、唐時代の女性の動作文化の実像を見たような錯覚である。ダイナミックな生き方、動的、積極的な人生を送っている人間像を感じた。

シルクロードの中国側入口である西安は実に興味深い。十年ほど前に同僚の考古学者による情報で、井真成という遣唐使留学生（日本人）の墓誌が西北大学博物館に寄贈されたことを知った。734年に36才で急死し、その墓が市東部の「さんすいの原」から出土したというのである。墓誌には唐の玄宗皇帝が「尚衣奉御」の官職を追贈し「屍（しかばね）は異国に埋葬するが、魂は故郷に帰るだろう」と記されていた。尚衣奉御は日本でいえば位階の正五位下にあたる。正五位とはきわめて上位の官位であり、例えば大正天皇の即位式では京都御所の正殿に参列する場合、皇族の後ろに衣冠束帯で参列することができるほどだった。これにより井真成は中国で科挙の試験に合格し、正式に唐の宮廷に奉職していたことが判明した。わずか36才でこの官位を持っていたとすれば「春日なる三笠の山に出でし月かも」で有名な安部仲麻呂と同様に優秀な役人だったといえよう。

井真成は717年第8次遣唐使であった。日本側の記録によれば、安部仲麻呂、吉備真備、僧玄昉といった留学生と共に、4つの船に乗って中国へ派遣された。あわれにも、早世してしまったが、彼のような彼の地で果てた留学生もかなりの数にのぼる。しかし、日本に帰国できた者もいた。空海や真備も帰国できた。舞楽を伝えたり、蹴鞠（日本式サッカー）を伝えた者もいた。



舞楽「蘇合香」の舞人
引用文献「国立劇場公演用ちらし」
2011年2月 大劇場

仏教だけでなく様々な科学や儀礼を「技能」習得により伝来させた人々も多い。このように 607 年の小野妹子の遣隋使以降、中国から帰国した留学生たちの働きによって日本は立国してきたのである。

2、中国から来た日本宮廷の舞踊と音楽

舞踊や音楽もガバナンス（日本の統治）に大きな影響を及ぼしたと推測される。612 年推古天皇の御世に中国からもたらされた雅楽、舞楽が宮廷で始まった。年間を通して宮廷の朝儀典礼や晩餐において重要な役割を果たすようになった。のちに朝鮮からの音楽、舞踊も採用されて左方は唐楽、右方は高麗楽が制度化された。たとえば道綱（「かげろう日記」の作者の息子）の場合は右舞の高麗楽「納曾利（のそり）」を舞った。

また昨年（2011年）2月に国立劇場で上演された「蘇合香（そこう）」は唐楽の大曲である。唐でこ

の曲を習い覚えた和邇部鳴継（わにべのしまつぐ）が日本に伝えたものだが、帰国途中で彼が一部を亡失したため、「序・破・急」のうち「序」二の帖が欠けていたという。現行の公演でも二の帖は上演されない。6人の舞人が蘇合香という草を形どった被りものをつけて華麗に舞うことで知られている。言い伝えでは古代インドの王がこの草を薬にしたところ、たちまち治癒したため喜んでこの曲を作らせ、またこの草を甲にして舞ったという。著名な左舞の大曲である。

一方、最近のテレビで韓国の「イケメン」スターなる人々がもてはやされているようだが、日本にもずばぬけて美貌に恵まれた男性がいた。825年（天長2年）に生まれた在原業平である。伊勢物語の主人公のモデルといわれている。彼は美貌の男性として知られているが、その和歌には万人の心を打つ華麗さがあり、哀れさがある。「春や春ならぬ・・・」はあまりにも有名である。「ちはやぶる神代も聞かず・・・」も百人一首に入っている。そして彼は舞や管弦も貴族の教養として身につけていた。母は帝の娘である伊都内親王である。

時代が下って日記文学、女流文学では、「かげろう日記」の中で 970 年（天禄元年）3 月 15 日に内裏で弓射の試合があり、道綱の母の記録では当時 16 歳の息子が味方の劣勢を盛り返して引き分けに持込み、人々から大変な賞讃を受けたと書かれている。さらに引分けのため、左方右方の両チームが舞を舞うプログラムに則り、舞においても息子道綱は素晴らしい出来栄であったので、帝から誉められて御衣を賜り、母は「あやしきまでにうれし」と書き残している。

3、王朝貴族のスポーツと舞踊

当時は弓や馬などのスポーツが貴族社会で盛んに実践されていたが、舞楽や雅楽も儀式の中ではセットになっていたのも、子弟はしっかりとトレーニングされていた。後に盛んになる「けまり（蹴鞠）」は、ボールの形状や材質が日本化されざるを得なかったため（日本では鹿の皮

を用いた)、少し時代がずれてポピュラーになった。
優雅なイメージが一般的だが、実のところはかなり激しい、汗臭い、運動量の多いスポーツだった。

例えば後鳥羽上皇は蹴鞠が大好きであった。彼は身体が大きく武術にも強く、1208年（承元2年）水無瀬離宮の鞠会で大活躍をし、彼のチームは2000回連続パスという記録をあげたと伝えられている。飛鳥井雅経は貴族の一人であるが、後に「蹴鞠」と「和歌」の道の家元となり子孫はこれを継承した。家伝書は日本製フットボールともいえる蹴鞠の技術やコンセプトを現代人にも伝えている。貴重な古文書となっている。このように日本古代型サッカープレーヤーとして優秀だった後鳥羽上皇は和歌や管弦にも優れていたが、衆知のように鎌倉幕府の時代に隠岐の島へ流罪となって果てられた。

さて蹴鞠の記録は900年代から明確に存在している。さらに1070年からの院政時代になると貴族の間でさかんにおこなわれた。それから150年余をかけて蹴鞠（日本式サッカー）の技法やゲームの様式、作法や記録などの知識が積み重ねられ、鎌倉時代になると「蹴鞠道家」と呼ばれる家元まで確立した。鎌倉時代には武士にもこれをたしなむ者が増えたという。室町時代になると陸奥から薩摩まで広がった。身分制度が存在した時代であっても、このような広がりをみせたという。

4、序破急をもつ蹴鞠（けまり）

舞楽の影響は蹴鞠のイベントにもみられる。天皇や上皇が正式に臨席して開催される蹴鞠の会を「晴の御会」というが、これは「序破急（じょ・は・きゅう）の三段」で進めるべしと定められていた。飛鳥井流の古文書によると「三段というは」「楽の序破急なり」と書かれている。ご存じの方も多いと思うが「舞楽の序破急とは？」楽曲構成の原理であり、ひとつのまとまった構成感をもつ多楽章形式をつくるために、拍子の有無と緩急によって、楽章を三つに区分して序破急で構成することである。（「鞠と舞」渡辺融による）

蹴鞠の場合「序」の段は、プレーヤーが定位置に居て基本的なキックを使ってボールを高く上げたり、基本的な身体使いをしてウオーミングアップしたり、四方に配置されている「かかりの木」（桜、楓、松、柳の4本）の上に蹴りあげて、どのようなルートで落ちてくるのか、経路を確かめたりすることで終わる。

「破」の段は、高度な技を繰り出してゲームを楽しんだり、難しいコース（経路）を選んで樹上に蹴りあげたり、「おどりあし」「きよくそく」「とんぼうがえり」など人々を驚かせるテクニックを駆使したりしてチームプレイを行なった。

「急」の段は、陽が傾き、会も終りにさしかかった頃に行なわれる。全員が蹴鞠コート of 中央に集まってきて互いに協力し合い、やさしい鞠を蹴りあげて長くパスが続くように頑張る。前



のりゆみ
賭弓（年中行事絵巻）
引用文献「日本古典文学全集」

述の後鳥羽上皇の記録は2000回連続パスを越えたというから、たいしたものである。そうしてプレーヤーが一体となって日が暮れたのであろう。私たちからみても素敵な時間である。

5、舞の序破急と蹴鞠や声明、能の序破急

舞楽の楽曲構成原理が、貴族という同じ担い手によってスポーツである蹴鞠に伝播したというのは面白い。渡来のスポーツでありながら、大陸とは違う変容を遂げた蹴鞠の構成は、武士の時代になっても他の芸能、たとえば声明とか能にも共通してみられる。もちろん、大陸でも同様の研究調査をすればなんらかの結果が出てくる可能性がある。これから、この種の研究はもっとおもしろくなるような気がする。

さて舞楽雅楽のその後であるが、1392年の応仁の乱で楽人は京都から離散してしまい、中央政府の儀式的権威もなくなった。都では別の新しい芸能が立ちあがり、やがてそれが武士の時代の主流となり、あるいは町人の時代の主流を形成する。ご存じのように能楽の時代、歌舞伎の時代が到来するわけである。散りぢりになった楽人たちは落ち延びて山間の部落や神社に入り、あるいは裏日本の山あい、東北地方へ、四国や九州の険しい僻地で生き残った者たちが芸能を伝えた。消えたものが大半であるが、民俗芸能として現在も舞や音楽が残されている。

6、舞踊遺産としての、もうひとつの価値

舞楽や雅楽は左方が唐楽であり、右方が高麗楽であるから、中国と朝鮮の伝統も伝えている。本国では激しい権力闘争による政変が起きており、現在のカンボジアに例をとるまでもなく前政府、前王朝の文化が根こそぎ壊滅させられて楽人の命も尽きているため、今となっては、日本にしか残っていないものも存在している。

中国・朝鮮の両国で壊滅した歴史的王朝の舞踊や音楽が、日本にのみ残されている。極東のもっとも辺鄙な島国であった日本列島の、厳しい山岳地帯の村々には、そのような稀少な舞踊文化が散り散りになって、いまま眠っているのである。

=自然人 アイヌ= こころの歌と踊り

第19回 「舟 唄」

アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎

私は幼少の頃から、母ヤエにいろいろなアイヌの歌を教えられたが、当時はアイヌ文化のすばらしい事など解らずに、ただろ覚えにしか聞いていなかったもので、本当に知っている歌の数も、そう多くはなく母の持歌は数百もあったから、自分の記憶しているものはその内の30分の1くらいであらう。

その中でも、私の一番好きな歌は「舟唄」である。

この舟唄は、母から伝えられて今まで時々歌っているが、もし、自分がこの歌を教わって覚えていなかったならば、現在は唯一人として知っているものはいないから、もちろん歌うこともできないので、この世から完全に消え去ってしまう運命になったであらう。

〈今では、世界のなかで自分だけが伝承していて、自分だけが歌える一番大切な舟唄〉

この歌の大好きなところは、この世で自分だけ唯一歌えるという自己満足感もあるが、それより

もこの唄のもつよさや深さである。

メロディーやリズム、そしてハーモニが、そして、その醸し出す全体の雰囲気は何んとも例えようもないほどいいのである。

アイヌ民族は、一般的に狩猟し、漁撈、採集をして生活していたと言われているが、もう一方では海洋民族でもあった。

イタオマチという丸木舟を元にして、その上方に板を重ねて縫い合わせて大きくした綴板（つづりいた）舟に、動物の皮（トドやアザラシ）やゴザを帆にした帆掛け舟で交易をしていたのである。

蝦夷（えぞ）から、太平洋または日本海の沿岸部を伝って本州へ渡り、互いに必需品の物々交換をしていた。

本州ばかりでなく、遠くは千島、樺太、沿海州まで行き、アムール川（黒竜江）を遡（さかのぼ）って、シベリヤの山丹人（さんたんじん）とも交易していたのである。

蝦夷錦（えぞにしき）といわれている絹織物や、ガラス玉の首飾り、刀剣、金属の耳飾、腕輪などは、このようなルートでアイヌの手に入ってきた。

舟唄は、このような交易をおこなう航海の時に歌われたものである。

チッ オ ウボポ（舟唄）

カラフト アトゥイ リーリー

（風が吹くと 海が波立ち）

カヤ リーリー

（帆よりも高く 折れ波が立つよ）

アトゥイ サーマ

（海上の様子が 次第に悪くなってきた）

セーイヤス セーイヤス

（それ漕げ えいこら えいこら《かけ声》）

クアニ ポン ポー

（我乗る舟は わずかに海面より下になり）

クアニ ポン チョロロカ

（次には反対に わずかに海上に上って）

オランダマ

（やがて一気に 波間の谷底に落ち下り）

コタン カス

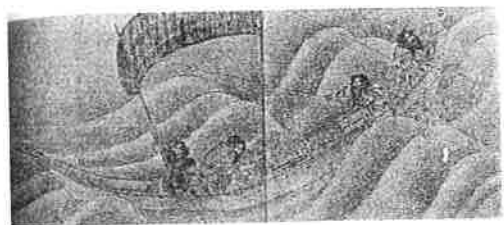
（ついに村の高さを越すほど 高くもち上がる）

セーイヤス セーイヤス

（それ漕げ えいこら えいこら）



イタオマ チッ(つづり板舟)



イタオマ チッで航海

以上は、アイヌ語を直訳したものであるから、舟唄の意味を、もう少し丁寧に説明すると次のようになります。

航海の途中で 北風が吹いてくると
海原全体が 盛り上って波立ってくる
舟の帆柱よりも 海面が高くなり折れ波が立つよ
海上の天候が 次第に荒れて悪くなってきた
危険がせまるから 力いっぱい櫂を漕げ
我々の乗っている舟は 最初はわずかに海面より下になり
次には反対に わずかに海面の上になったりして
(だんだん風や波が激しくなってくると)
やがて一気に 深い波間の谷底に落ち下り
ついには 遠くむこうに見えるコタン(村)の
その陸の高さを 越すほど高く 波の頂上におし上げられる
コタンの入江は近い もっと力をこめて漕ぐのだ

それほど大きくない、せいぜい七、八人乗りの帆掛舟で、遠くの国々への長い航海は、幾多の困難をともなった事であろう。

それでも、我々の祖先は勇気をもって日本国内や外国と交易をつづけてきた。

時あたかも江戸幕府が鎖国をしていた時代である。

この舟唄は、つらい航海の途中で、どんなにか舟人達の心を慰め、また力づけたことかと計り知れないものを感じる。

普段の海模様のときは、帆掛舟も風をはらみ順調に航海をつづけるので、舟唄もそれに和して歌われたことと想像する。

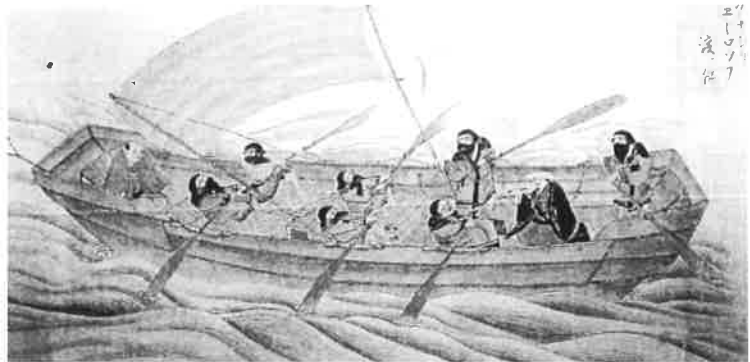
海が風いで、全く風が吹かない静かなときには、郷里の家族のことなど偲んで、ゆっくりと呟やくように、または、鼻歌まじりで歌ったかもしれない。

嵐がきて、暴風雨になり海が激しく荒れ狂うときには、舟唄を歌っているところではないので、せめて、「セーイヤス、セーイヤス」と、かけ声だけでも必死にかけ合い、懸命に舟を操作して時化(しけ)の難関を乗り切ったことであろう。

アイヌの歌には、独特なイントネーション(抑揚)がある。

この舟唄にも、ところどころ微妙な節回しがあり、そこを歌いこなすのが難しいけれども、味のあるところでもある。

アイヌの歌謡の中には、音譜だけでは表記できないものが数多くあり、音楽の専門家でも悩むことが、しばしば見受けられる。



イタオマ チナで渡航
(蝦夷人之図・18世紀末)



クメール芸術協会のリハーサル風景
(左上)猿役の基本練習
(右下)ラーマーヤナ物語 影絵のシーン
(写真提供:丸茂氏)

平成24年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成24年

4月27日（金）黛民族舞踊文化財団総会

7月12日（木）～7月21日（土）

アジア民族舞踊交流会

中国雲南省演劇院訪日代表団来日

韓国金梅子・康美利舞踊代表団来日

交流会日程

7月12日（木）赤坂区民ホール

7月15日（日）学習院百周年記念会館

7月16日（月）群馬県太田市新田文化会館エアリスホール

7月17日（火）群馬県太田市世良田小学校児童と交流

7月18日（水）神奈川県民ホール小ホール

平成24年 1月15日（日）世界舞踊祭（赤坂区民センター）公演に黛民族舞踊団参加

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E. T. C. No.21発行

民族舞踊文化 No.24発行

舞踊文化 E. T. C. No.21

発行人 加戸 守行

平成24年4月27日発行

港区赤坂 3-10-3

編集人 黛民族舞踊文化財団事務局

財団法人 黛民族舞踊文化財団

電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639